

4. 関連施設調査の記録 1

(1) 第1回先進地視察(九州・中国地方)

目的： 新名護博物館建設に先立って、先進的な運営を行っている博物館を視察し、その施設だけでなく、組織体制、市民活動等について情報収集・意見交換し、名護市の新博物館建設に役立てる。

日時： 平成22年3月9日(火)～3月12日(金)

視察地： 出島史料館(長崎)／長崎歴史文化博物館(長崎)／北九州市立いのちのたび博物館(福岡)／九州国立博物館(福岡)／萩博物館(山口)

参加者： 検討委員(安里進・千木良芳範・前田裕子)／名護博物館(山本英康・村田尚史)／トータルメディア(熊谷徹・三嶋啓二)

① 出島史料館

長崎市出島町6番1号／平成18年4月1日設立／8時～18時(夏期・イベント等の期間は～19時)／休場日なし／敷地面積12,320㎡
＜運営＞長崎市直営／入場料(大人500円他)／入場者数(平成20年度339,067人)
＜運営費＞平成20年度(収入 102,999千円・歳出 91,143千円)



② 長崎歴史文化博物館

長崎市立山1丁目1-1／平成17年11月3日設立／設置者：長崎県・長崎市／設計：黒川紀章建築都市設計事務所／展示設計：乃村工藝社／建築面積3,557㎡／延床面積12,239㎡(駐車場2581㎡を含む)／鉄筋コンクリート3階建／駐車場(有料)：大型バス5台(要予約)・乗用車62台
＜事業費＞約80億円(長崎県53億円／長崎市27億円)
＜管理運営＞市から県に業務委託／指定管理者：(株)乃村工藝社



③ 北九州市立いのちのたび博物館

福岡県北九州市八幡東区東田2丁目4-1／平成14年11月設立／設置者：北九州市／敷地面積31,000㎡(駐車場15,500㎡を含む)／建築面積8,770㎡／延床面積17,000㎡／展示面積約6,100㎡(自然史系約4,000㎡・歴史系約2,000㎡)／駐車場(有料)：大型約40台・普通車約300台
＜組織＞職員総数35人(事務員17人・自然史課学芸員11人・歴史課学芸員7人)



④ 萩博物館

萩市大字堀内355番地／平成16年11月開館／設置者：萩市／鉄筋コンクリート造・平家一部2階建／床面積4,268㎡／展示設計：(株)トータルメディア開発研究所／総事業費約31億4100万円／駐車場(市民は無料)：大型バス8台・普通車66台＜組織＞学芸員・研究員6名(歴史担当3名・民俗担当1名・海洋生物担当1名・天文担当1名)／事務局5名(館長含む)／NPO萩まちじゅう博物館



4. 関連施設調査の記録 1

⑤ 九州国立博物館

福岡県太宰府市石坂4-7-2/2005(平成17)年10月開館設立/設置者:独立行政法人・福岡県/敷地面積160,715㎡・建築面積14,623㎡・延床面積30,675㎡・東西160m×南北80m/地下2階・地上5階
<組織>国(独立行政法人)30名・福岡県立アジア文化交流センター16名/



出島史料館敷地内



長崎歴史文化博物館入口



萩博物館入口



九州国立博物館内ミュージアムショップ



北九州市立いのちのたび博物館展示室



九州国立博物館入口

4. 関連施設調査の記録 1 - 出島史料館 -

① 出島史料館

■施設

所在地 長崎市出島町 6 番 1 号
設立 平成 18 年 4 月 1 日
設置者 長崎市
開場時間 8 時～18 時(夏期・イベント等の期間は～19 時)
休場日 なし
敷地面積 12,320 ㎡

■運営

運営形態 長崎市直営
料金徴収・案内所・売店 長崎国際観光コンベンション協会委託
入場料 大人500 円・高校生200円・小中学生100 円
入場者数
平成19年度 385,134 人
平成20年度 339,067 人
小中学生 91,138 人・高校生 24,563人・一般 201,872人 ・無料 21,494 人
平成 21 年度(見込み) 380,000 人

■運営費(維持管理等)

平成 19 年度収入 102,406 千円 歳出 87,718 千円差引 14,688 千円
平成 20 年度収入 102,999 千円 歳出 91,143 千円差引 11,889 千円



史料館入口



長崎市文化観光部担当との意見交換



ボランティア・スタッフ



ミニチュアの出島再現展示



ボランティアガイドが解説する当時の西洋料理を再現した食卓



復元整備してイベント時に稼働させている秤

4. 関連施設調査の記録 1 - 出島史料館 -

■意見交換記録

平成22年3月9日 13:30~15:30

●…名護博物館新館建設検討委員 ○…出島史料館

1:名護博物館からの質問事項への回答、及び施設の概要解説。

- 長崎市は元々平和学習と観光が主な柱だったが、出島の事業をきっかけに、文化と観光の融合という他に余り例をみない考え方を始めた。「さるく博」は従来のハコもの観光から町並みそのものを観光資源と見なすという考え方で始められた。現在では長崎遊さるく・通さるく・学さるくなど50余りの街歩きコースを、年間約1000万人が利用している。内容は、予約不要で観光客がマップを見ながら自分で歩く無料のコースから、要予約でガイドが引率する有料のコース、期間限定のコース等様々で、時間も1時間半ほどのものから丸一日かかるもの、料金も1000円から数千円まで様々である。
- 元々、長年観光ガイド・平和ガイド・出島ガイドが別々にボランティアで活動をしていたが、平成18年の「長崎さるく博」をきっかけに、三種類あったガイドボランティアを一元化した。
- ガイドボランティアは、以前は市の観光課がとりまとめをしていた。「さるく博」以降は長崎国際観光コンベンション協会へ段階的に事業を移行している。現在ではツアーの申込等もコンベンション協会が窓口になっている。協会へは市から職員が3名出向していたが、事業の移行に伴いその人数も徐々に減ってきており、平成22年度からは出向は停止し全面委託となる。その代わりに市から補助金が下りることになる。
- ガイドの間で問題になっているのは高齢化。ガイド事業そのものが始まってから18年ほど経ち、ガイドの平均年齢は70歳代になっている。出島ガイドが街歩きガイドを兼ねていることも多く、1時間半ほどの徒歩の行程が体力的にきついという声が多くなってきている。世代交代が今後の課題。
- 出島の整備事業は昭和26年に始まった。長崎は元々公有地がほとんど無く、平地も少ないため港湾はほとんどが埋め立て地である。出島の土地も元は民有地であり、港湾に近い一等地のため銀行や商店が建っていた。出島の復元は用地買収から始まり、すべての土地を買収し終わったのは平成13年の事である。土地購入費だけでこれまで約80億円が投じられている。商館などの建造物は現在のところ1/3が復元終了している。また現在は周囲が埋め立てられ出島の形が分かりにくくなってしまっているため、将来は以前の石橋を復元して海の中にあったというイメージが作れるようにしていく計画である。
- 施設の運営費は入場料で賄っている。出島では平成19年度は修学旅行生が入場に占める割合は25%だったが平成21年度は35%になる見込みである。約10万人が修学旅行生と言うことになる。以前は長崎と言えばグラバー公園と平和祈念像と決まっていたが、最近ではそれに加えて出島という選択が多くなってきているようである。グラバー園が現在年間90万人（ピーク時300万人）の入場があり、その内約45%が出島へ流れてきている。
- 現在の市長はボランティアガイドの経験者で、「さるく博」も市長の発案で開催された。
- さるくコースはすべて市民からの発案で、市が考えたものは一つもない。市の小中学校では「我が街さるくマップ作り」に取り組んでいて、市をあげて街の良さを再発見するということにつとめている。街歩きは全国にあるが、市内に40~50もあるのは珍しい。さるくコースで人気のあるものは一日の内に5、6班組むこともある。

2:質疑応答

- 年間の入場者は。
 - 平成20年度で約33万人である。リニューアルオープンした18年度は47万人だったので、減少傾向ではある。今年度、平成21年度は31万人の見込みである。
- 運営スタッフの構成はどのようになっているか。
 - 長崎市職員が学芸員1名と嘱託員1名常駐している。元々この施設は遺跡の発掘からスタートしたため教育委員会の所管だったが、2年前に文化課へ移管したという珍しいケースである。
- ボランティアへの研修の費用はどのようになっているのか。
 - 研修会の講師は学芸員が担当しており、研修そのものは無料である。その他ボランティア同士が自主的に勉強会を行っている。

4. 関連施設調査の記録1 - 出島史料館 -

●来場者はほとんどが県外からか。

○ほとんど県外からの来場者である。リニューアル時は地元からの来場者も多かったが、出島としてゾーン化した反面有料となったので逆に地元の人々が来にくくなってしまった。通常は月に100人程、「さるく強化月間」として無料になると1500人程の地元からの来場がある。しかし市民の財産を地元の人々に還元しなくては意味がない。元々市内在住の60歳以上は無料だが、来年度から年三回開催の企画展の期間は無料にするなどして、無料で入れる期間を年のうち半年位に増やし、もっと地元の人たちが来やすくなるようにする予定である。

●ガイドの登録のシステムは、一定期間の研修などを経て登録しているのか。

○登録の際は特に研修などはなく、希望者は誰でも登録できる。前月に予約表を配り、各々ガイドできるところに入ってゆるやかにシフトを決めていく。どのシフト、どのポストに入ってほしいなどの強制は、ボランティアなので出来ない。やはり不人気なポストというのはあり、穴が空いてしまうこともままある。

●ガイドは元々平和ガイドから出発したのか。

○人数は観光ガイドが多かった。平和ガイドは「語りべさん」と呼ばれる被爆体験について語るボランティアがかなり昔から存在していた。

●売店はどのようなシステムになっているのか。

○出島内に2カ所、スペースを目的外使用として許可しコンベンション協会へ貸している。賃料は売上の5.15%（消費税抜）、光熱費は別途請求している。

●資料の中で、施設の歳出が平成18年度と19年度で変わっているのはなぜか。

○18年度は17年度に行っていたリニューアル工事の費用の残分が多少含まれている。19年度以降が平年度の歳出である。およそ年間1億の運営費で、32万人の入場料でランニングコストの損益ゼロという事である。

●出島の建造物などの復元根拠は何か。

○出島そのものが時代により変遷があるが、現在典拠にしているのは19世紀初頭の出島の姿である。発掘遺構、文献、絵図等を資料として総合的に判断している。また当時の出島の精巧な模型がオランダの博物館に現存しており、それも大きな資料となっている。その他、去年ライデンの博物館で出島の平面図が見つかった他、佐倉の歴博など、長崎よりも県外・海外に資料があることが分かっており、資料の調査研究を続けている。

●ボランティアの高齢化が課題としてあげられていたが、他に何かあるか。

○ガイドによって知識量の差があり、同じコースでもガイドによって話が変わってくるということが起きている。ガイドの標準化をどうしていくかということが今後の課題。高齢化は難しい問題。ほとんどのガイドが平日昼間のため若い人がなかなか出来ない。

●ガイドを班分けしているとのことだが、その事による弊害はないか。

○今のところ特に聞かれない。

●ボランティアの待機場所はあるのか。

○特にはない。各々常駐の案内場所に時間になったら待機するという方法をとっている。

●集客広報で力を入れていることは何か。

○近年は修学旅行生の誘致に力を入れている。特に関東エリアに焦点をあて、2年先を見越して一日5~6校を営業している。不況のおおりで海外旅行が減ったこともあり国内の旅行先として認知度は高まりつつある。これらの事業もすべて平成22年度からコンベンション協会が一括して行う。その他、小中学生100円の入場料が40円になる割引券のとじられた冊子の配布、サンキューパスポートと言って市内9カ所の施設の内希望の3カ所が大人1000円で入場できるパスポートの発行などを行っている。

●長崎歴史文化博物館との連携はあるか。

○資料の貸し借りなどの交流はあるが、特に連携している事業はない。長崎歴博は元々市立だった施設で、県と市が共同で設置しており、現在は市から学芸員が一名出向している。運営は指定管理者が行っている。

質疑応答終了し、施設内を見学。

4. 関連施設調査の記録1 - 出島史料館 -

千木良芳範委員メモ

○市民ボランティアについて

- ・もともとは3つの独立した組織であったが、長崎さるく博を契機にひとつにまとまった。
- ・長崎国際コンベンション協会が事務局。全体では453人が登録されているが、出島へは11名程度がきている。
- ・出島では1日に4回(夏は6回)のツアーを行っており、その度に交通費相当として1000円/回を支払っている。
- ・ボランティアが高齢化してきている。ボランティア間の知識量の差があることなどが問題点としてあげられる。

○入場料について

- ・長崎市民は無料。市の広報に「ミミ」をつけており、それを持ってくることで市民とみなしている。
- ・39パスポートの発行。市内に所在する私立の観光施設のうち、3つを選んで1000円で入れる券を発行している。

○修学旅行の誘致

- ・コンベンションに委託して取り組んでいる。関東(千葉など)あたりへ誘致団を送っている。これは直接各学校の修学旅行担当に会って、宣伝している。サービス券付の冊子などを配っている。少しずつは効果が上がっていると思われる。

○運営について

- ・市の文化観光部に所属しており、市の直営である。市の職員は5名で、そのうち学芸員は1名である。
- ・窓口業務(料金徴収や案内所は長崎国際観光コンベンション協会へ委託している。売店は同協会の運営である。売店については売上げの5%を賃借料としてもらっている。
- ・年間380,000人くらいが入場。基本的にはすべて有料であるが、市内の60歳以上や障害者等は無料になっている。また土曜日と夏休み期間は児童生徒は無料になる。
- ・企画展は年3回程度を開催。費用は全体で150万くらい。それぞれの企画展とも最初の1ヶ月は市民は無料である。企画展そのものを無料にしても、入場者数は思わしくなかったので有料にしている。

○誘客の工夫

- グラバー邸(年間100万人くらいの入場)から20分くらいなので、そちらから観光客を誘致する、流れ込ませる工夫をいろいろ考えている。

前田裕子委員メモ

- ・出島復元整備事業の途中であるという印象はところどころに感じるが、復元された部分は小物から壁紙にいたるまでこだわっている。
- ・ボランティアガイドがとても熱心で心から楽しそうにしている。
- ・詰め所で待機中の年配の横柄な印象を受ける、耳も遠いボランティアガイドもいた。ということで、ボランティアガイドの質の向上は課題とのこと。
- ・長崎市全体で「長崎さるく(歩く)」という取り組みをしており、印刷物(地図、ガイドスケジュール案内)などが充実している。
- ・ボランティアの登録数は453名(実際に活動してもらえるのは140~150名)と多い。ガイドの研修会などは行っているが、ガイドの質の平準化は課題らしい。
- ・リフォーム後(H18年)に50万人近い入場者数があったが、翌年から年々下がっている。H20年33万人。集客については工夫や送客の仕組みが必要と感じた。
- ・動画アニメでの解説も見やすく理解しやすかった。(画像)



出島史料館展示室

4. 関連施設調査の記録 1 - 長崎歴史文化博物館 -

② 長崎歴史文化博物館

■施設

所在地	長崎市立山1丁目1-1
設立	平成 17 年 11 月 3 日
設置者	長崎県・長崎市
設計者	建築設計：黒川紀章建築都市設計事務所 展示設計：乃村工藝社
開場時間	8 時～18 時(夏期・イベント等の期間は～19 時)
休場日	なし
敷地面積	13,801㎡／建築面積 3,557㎡／延床面積12,239㎡(駐車場2,581㎡を含む)
構造	鉄筋コンクリート造 3階建
フロア構成	3F:企画展示室／2F:歴史文化展示ゾーン(常設展示室)・イベント広場・伝統工芸体験工・貸工房／ 1F:ホール・資料閲覧室・長崎学相談コーナー・ミュージアムショップ
駐車場	大型バス5台(要予約・600円/30分)／乗用車62台(140円/30分)

■組織(25名)

館長・名誉館長	
統括マネージャー	
教育研究グループ	長崎歴史文化研究所(県・市の学芸員・教員等) 博物館業務(レファレンス・資料収集・保存・展示・教育)
広報営業グループ	集客・観光振興・広報・出版
経理管理グループ	館運営・マネージメント

■運営

開館時間	8:30～19:00(展示ゾーン・ショップ) 10:00～17:00(伝統工芸体験工房・貸工房) 10:30～21:00(レストラン)
休館日	第3火曜日(祝日の場合は翌日)
常設展入館料	一般600円(団体480円・定期観覧1800円)／高校生400円(団体320円・定期観覧1200円) 小中学生300円(団体240円・定期観覧 900円)
事業費	約80億円<県・53億円／長崎市・27億円(県:長崎市=2:1)>
管理運営	長崎市(1/3) から長崎県(2/3) に業務委託 指定管理者:(株)乃村工藝社／平成17年4月1日～平成22年3月31日



エントランスホール



指定管理者との意見交換



ミュージアム・ショップ

4. 関連施設調査の記録 1 - 長崎歴史文化博物館 -

■意見交換記録

平成22年3月9日 16:00~19:00

●…名護博物館新館建設検討委員 ○…長崎歴史文化博物館指定管理者（乃村工藝社）

1;長崎歴史文化博物館指定管理者（乃村工藝社）より、施設と組織の概要解説。

2;質疑応答

●組織図の教育研究グループと、長崎歴史文化研究所は組織としては別のものなのか。

○同施設内にあるが部屋は別になっている。研究所は外部の有識者組織との橋渡し役を担っている。研究グループの学芸員は研究職であるが、指定管理の職員である。研究所の所長は学芸員が兼任しているので、同一視されることがあり、外から人が入りにくいという問題がある。学芸員の12名は文化研究所。

●県と市の職員はどのように配置されていて、事業にどのように関わっているのか。

○指定管理者の監督にあたるため、開館当初は市職員2名、県職員2名、教員2名が配置されていたが、現在は減員して各1名ずつ合計3名である。職員が企画展などの展示運営事業に関わることはほとんどない。旧市立博物館・県立美術館博物館の資料を取り扱う際には県・市職員の確認が必要。新規の資料寄贈がある場合等は県・市職員が対応する。

●他館から資料を借用する際に、資料を取り扱うのが指定管理者である事が問題になることはないか。

○これまで特に問題は起きていない。書類は館長名で発行し、私たちは指定管理者ではあるがあくまでも「県博職員」として行動している。

●県・市から管理運営費が支払われているが、損失が出た場合は補填があるのか。

○管理運営で行う負担金事業については損失が出て補填はない。光熱費などを節約して経費が削減できた場合は返金することになる。直接利益となる利用料金事業は、初年度で約2000万円の赤字、2年目で多少黒字になったが、後は赤字が続き、5年経った今年も累積1500万円ほどの赤字になっている。

●観覧料と減免措置について。

○常設展示の観覧料は600円（今年だけは特別に「龍馬年閏」として一部展示を変更し、料金も500円に変更）、県内小中学生は無料となっている。

●収入のうち使用料とあるのは。

○施設内の会議室・ホールの使用料と、資料の画像の使用料である。画像は旧市博・県博時代のものに加え新規撮影したものをストックしている。使用料は、使用目的が純粋な商業利用の場合は1点1万円、研究目的の場合は無料、間を取って出版に使用する場合は1000円となっている。利用頻度が高く事務量が膨大なため、担当者1名が専属で対応にあっている。

●展示設計業者の乃村工藝社と、指定管理者の乃村工藝社では立場上の区別はあるのか。

○指定管理事業も乃村工藝社の事業の一部ではあるが、設計とマネージメントは社内での部署が異なっている。管理を行っているからといって、館の企画展等の展示工事がすべて乃村工藝社1社に発注されるという事はなく、管理者としての公平を保つようにしている。

●広報分野をJTBに再委託しているという事だが、この点が問題になったことはないのか。

○始めから組織編成にJTBを入れてあったので特に問題視されたことはない。JTBには3000万ほどを再委託しているが、集客などに思ったような効果があがっているわけではない。しかし代理店業にしか出来ない事は多いので、単独で広報をしているよりも効果はある。企画展では企画の段階から密に情報を共有して広報戦略を立てている。

4. 関連施設調査の記録 1 - 長崎歴史文化博物館 -

- 企画展も利益がさほど出ず運営上かなり厳しい状況だが、それでも指定管理業務を請け負うメリットは何か？
 - 展示を設計・制作して納めるまでがこれまでの事業だが、その後の運営に関わることでしか得られないノウハウがある。これまでの設計を振り返ると、作ったときは良くて運営し始めると無駄の多くなるようなものを作ってきており、これらは制作だけをしては分からなかった部分である。今後は設計段階で10年先のことまで見越した提案をしていけるようになるという、目に見えない形でのプラスがある。

- 県と市の関係について。負担金の内訳と職員の配置は？
 - 建物については県：市が2：1で出資、管理・運営費は1：1で年間1億7500万円ずつ出資している。市は県に管理運営の事務を委託し、県と指定管理者が協定を結んだ上県から管理運営を委任している。市からは文化財課の、県から文化振興課の職員が館に出向し駐在している。市・県・指定管理の間では毎週1回調整会議が開かれ、かなり細かい部分まで情報の共有化がなされている。

- 展示設計をする上で気を付けたことは何か？
 - 常設展が県の施設でありながら、近世長崎市周辺の歴史に特化しすぎているきらいがある。その点は企画展で他の部分を出るだけ取り上げてバランスを取るようにと考えている。また近世以前の情報は入口の検索コーナーで情報提供している。

- 館の名称が「長崎歴史文化博物館」だが、実際の展示内容は近世が中心となっており、名称と内容にずれを感じるし、中身が分かりにくく名称からのアピール度も低い。この点は議論にならなかったのか？
 - 基本構想の段階から名称は変わっておらず、敷地が奉行所跡ということもあり、近世の歴史を中心に取り上げられることに対して特に抵抗がなかったようだ。

- 集客で特に力を入れている点は何か？
 - 修学旅行生の誘致に力を入れている。以前は高校の修学旅行は広島・長崎が定番だったが、空路を使うようになって沖縄と海外に流れてしまっている。

- 出島史料館と内容が重複する部分があるが、比較されることはあるか？
 - 出島の方は建築復元であるので、それほど比べられることはない。体勢も市直営と指定管理と異なっている。

- 県内施設の年間集客数は？
 - 県内の施設ではグラバー園と平和祈念像の来場者が1番多い。2番、3番に出島、歴博と続くが、同じくらいの来場者。歴博はイベントなどの利用者を含めて年間40～60万人、多くて70～80万人。但し常設展示の入場者はその内3割ほどで。目標は年間100万人としたいが、その為には長崎全体の入境者を底上げする必要がある。

- 年間の企画展は何回か？
 - 企画展は年間6～8回開催、自主企画と巡回展が半々である。自主企画の予算は事業によって異なるが、およそ1300万から3000万円ほど。

- 教育普及面ではどのような事業があるか？
 - 教育担当者として職員が4名、うち2名が学校対応にあたっている。体験プログラムは少人数向けのものを5コース用意。受講料は材料費程度。他には見学プログラムを用意。教育委員会との接点がないため、教員との意見交換会を設けて展示利用の授業などを話し合い、学校現場との協力体制作りを目指している。また、電話回線を使ったテレビ会議システムで、長崎県内の離島にある高校と小学校への遠隔授業も実践している。

- 博物館に対する教員側の意欲は高いか？
 - 協力体制ができるに従って意欲も高まってきているので、色々な意見を話しやすい環境を作っている。館と学校との関係は、協力校とパートナー校とがあり、協力校は学校単位での一括の協力体制、パートナー校は先生個人がメンバーとなるので、個人の顔の見えるパートナー校の方が意欲的な場合が多い。
 - 教員側に博物館をどのように利用できるかの認知度が低い。生徒だけでなく、教員への教育普及活動が必要である。教員の研修会等にこちらから出向いて行って、博物館で出来ることをアピールする必要がある。

以下、館内・バックヤード見学を行い終了。

4. 関連施設調査の記録 1 - 長崎歴史文化博物館 -

千木良芳範委員メモ

○建設事業費

- ・80億円。県と市が2:1の割合で負担。運営費(指定管理料3億5千万円)は県と市が1:1で負担している。

○運営について

- ・完全指定管理者制度を適応。(株)乃村工芸社が指定管理者となっている。
- ・博物館職員として県及び市の職員はいない。しかし、他館との資料のやり取りなどで、公立でない都合が悪いことなどもあり、県と市の職員が常駐している(部屋は別)。
- ・博物館の運営は指定管理料(3億5千万円)と指定管理者の持ち出し(1億5千万円)の、約5億円。
- ・指定管理料(指定管理者負担金)は、人件費、施設運営費、事業費(調査研究、生涯学習に関わるもの)に支出される。基本的には県予算のトンネル支出という考え。
- ・観覧料、施設使用料、図書販売、駐車料金、ショップやカフェの収入などが指定管理者の収入となる。
- ・常設展の維持管理、企画展の開催、ショップやカフェの経費などは、すべて指定管理者が負担している。
- ・企画展経費が指定管理者の経費の大きな部分を占めている。企画展は年6から8回。半数は自主企画、半数は巡回展である。自主企画の展示費用は概ね600から1000万円くらいで、巡回展は3000万円くらい。
- ・単独の企画展で黒字になることはめったに無い。助成金などが入ると、たまに黒字になる。これまでの5年間で1000万円くらいの累積赤字になっている。
- ・開館時間は8時30分から午後7時までになっているが、冬場(12月から2月にかけて)は夕方のお客さんが少ないため、時間を短縮したらという議論もある。
- ・広報営業グループの仕事を重点項目として位置づけており、指定管理者の職員とは別に、業務をJTBに委託(3千万)し3人が出向してきている。

○観客に一番人気は

- ・お白州での寸劇が一番受けた。年間3回くらいプログラム入れ替え。実施は12名くらいの寸劇ボランティア。

○指定管理者

- ・(株)乃村工芸社が指定管理を受けた理由は、経営理念として「造って終わりの時代は終わった、造ったものをどう生かすか」という次のステップを考えている。そのためには運営のノウハウを蓄積していく必要がある。乃村のプライドもある。

○学校関係との連携について

- ・教育普及担当は4名、そのうち2名が学校担当となっている。
- ・ボランティアは100名が登録されている。
- ・学校担当でも学校から来ているわけではない(教員ではない)ので、学校とのパイプを太くする目的で、協力校(パートナーズ校)として21名の先生にお願いして、意見交換する場を設定。効果は上がっている。
- ・遠隔授業として壱岐などで実施した。

前田裕子委員メモ

- ・大河ドラマとのコラボレーションで企画展開催中。有名な地域にまつわる偉人を最大限に活用している。世の中のタイミングに合わせた展示内容、アピールも大切。
- ・企画展示場にスタッフがいて誘導や説明をしていた。フォトスポットも遊び心があって良かった。
- ・歴史の町でテーマがどれを取っても、日本国民にとって一度は習っている事柄でわかりやすく、しかもコンパクトに名所が市内におさまっており、路面電車を使っても移動も安く早いということから、市内観光は充実していると感じる。
- ・観光関係の発行するマップや「長崎さるく(歩く)」のガイド案内がいくつもあり、内容も詳しく充実している。ガイドの申し込みはネットでも出来るようになっていて、コンベンションの誘致にも積極的な施策を行っており街全体での誘客ということでは今後の参考にしたい。

4. 関連施設調査の記録 1 - いのちのたび博物館 -

③ 北九州市立自然史・歴史博物館(いのちのたび博物館)

■施設

所在地	福岡県北九州市八幡東区東田2丁目4-1
設立	平成14年11月
設置者	北九州市
面積	敷地面積31,000㎡(駐車場15,500㎡を含む)／建築面積8,770㎡／延床面積17,000㎡／ 展示面積約6,100㎡(自然史系展示:約4,000㎡／歴史系展示 :約2,000㎡)
駐車場	大型約40台 250円/30分／普通車約300台 100円/30分
整備費	総計166億5900万円(平成7年度～平成14年度) 用地費40億9300万円・設計費3億6700万円・工事費83億8500万円・展示費26億1200万円・ 備品10億200万円・事務費等・2億円
展示施設	自然史ゾーン(アースモール・エンパイラマ館・生命の多様性・自然発見館) 歴史ゾーン(文化学習園・探求館・テーマ館)
組織・職員構成	職員総数35人 事務員17人(ミュージアムティーチャー3人・嘱託4人含む) 自然史課学芸員11人／歴史課学芸員7人
教育・普及活動	(1)博物館セカンドスクール事業 博物館への誘致・学校教育支援・家庭教育支援 (2)一般市民対象の普及活動 講演会・野外観察会・室内講座等:H19年度108回(3,796人) 職場体験・博物館実習:H19年度116回(7,592人)

■運営

開場時間	午前9:00～午後5:00
休館日	年末年始・6月下旬～7月上旬
常設展入館料	一般500円／高校大学300円／小中学生200円
入場者数	平成14年度162,527人(11月3日開館)／平成15年度321,425人／平成20年度322,726人

■ボランティア(シーダー)

登録者	合計54人(男性23人・女性31人) ※2010.3現在
活動内容	博物館の展示解説／教育・普及講座等の事業(体験学習、体験コーナー)／ 特別展イベントの補助(工作教室など)／自主活動(紙芝居、折り紙、小倉織など)
活動時間	原則午前9時～午後4時(このうち3時間を1回の活動とする。終日活動の場合は2回)
登録	博物館指定の講座修了者で希望した方／登録期間は2年 ※登録の更新は原則として月4回以上の活動実績があること
現況の活動	原則として月に1回、博物館で下記の活動を実施(予定表に名前を記入し当番表を作成) ・スポット解説、館内案内・団体の体験学習(レプリカ作り、勾玉作りなど)の補助 ・館内巡回・学芸員の普及講座補助・学芸員の普及講座補助・特別展の監視・イベントの補助 ・紙芝居・折り紙などの実施・綿栽培、糸紡ぎ、小倉織に関する実演、体験
開館後の住民へのPR方法	博物館HP／市政だより／ポスター、チラシの作成・配布／案内リーフレット配布 博物館ガイドの販売／市広報室を通じた報道機関への情報提供／ 北九州市他施設・事業連携による周知

4. 関連施設調査の記録1 -いのちのたび博物館-

■意見交換記録

平成22年3月10日 13:00~16:30

●…名護博物館新館建設検討委員 ○…北九州市立自然史・歴史博物館(いのちのたび博物館)

1:北九州市立自然史・歴史博物館(いのちのたび博物館)による施設概要

- ボランティアの方はシーダーとお呼びしている。知識の種を蒔く人ということです。様々な来館者の皆様に対して知識へ意欲の種を蒔く人として呼んでいる。シーダーのマークは黄色のジャケットの背中にこのマークが付いている。非常に目立つ色ジャケットなので館内のどこにいても見つけられる。
- 現在、登録者54名(男23名・女31名)。ご年配方々が主力。具体的な活動は展示解説。館内で散らばって来館者の様子をみて必要であれば解説する。
- MT(ミュージアムティーチャー)は、学芸員に体験学習や普及講座の補助をお願いしている。自主活動として館内のいたるところで昔遊び・小倉織りの実演・手作りの紙芝居等、来館者からの評判も良く人垣が出来る状態。
- ボランティアの登録は博物館の講座修了者、登録期間2年、月4回以上の活動実績とあるが柔軟対応している。開館に先立ってボランティア養成講座はH14年10月に開始していて、現在、5期生まで活動している。
- ボランティア養成講座は5回。受講者の90%以上が登録されているが、活動される人数が減っており、現在54名が残って活動。登録54名中、家庭の事情などで休止の方が6名。月平均211回、1回3時間、一人あたり月4回位は活動している。
- 月一回ボランティアの意識を高める為、学芸員による交流ゼミがある。毎回担当の学芸員を変えての講話。講話の後に日頃の活動について振り返る時間をもっている。ボランティアを募り、近隣の博物館や他ボランティア活動の見学等にも取り組んでいる。
- ボランティア組織運営体制は、参加される方が参加できる時に参加する。個々の都合に合わせる事になる。次の月の予定表を出して参加できる方の名前を書き込んでもらっている。

2:質疑応答

- ボランティアの方は市内の人が多いか?
 - 市内の方が多い。養成講座の時は遠くの方もいたが、やはり月4回以上の活動となると参加出来なくなる。
- ボランティアガイドはどのようなタイミングで解説しているのか?
 - ガイドは、日によっても立つ場所人も異なる。来館者の要望があれば展示物の解説もする。団体の事前の予約があれば要望に応じてシーダーにも解説に加わってもらい協力をお願いしている。シーダーの館内での配置場所には、特定の場所といった決まりはない。自分の得意な場所に立っている方もいる。
 - 毎月、この様な新しい予定表を次々と出していく。シーダーはそれを見て参加できる日に名前を書き込む。シーダー自身で予定表の参加人数を確かめながら調整している。
- 館による参加人数の調整はないのか?
 - まず、シーダーの気持ちの中で、この催しにはぜひ参加したいという強い要望がある。自分達の都合に合わせて、博物館の催しに参加して利用しよう協力しようという考えがかなり定着している。次々と展示や講演がある時など、マルが幾つも増えていく状況。○をしても参加できない場合は電話連絡がくる。皆さん責任感を持っている方が多い。どうしても必要な場合は早めに声をかける事もある。
- 例えば交通費は出して貰えるのか? 夏休みなど子供が多い時期はどう対処してるのか?
 - 交通費は一切出していない。まったくのボランティア。駐車場を使われる方に減免する位。夏休みの特別なシーダーの調整はしていない。シーダーは早めの予定表をみて忙しい日には自主的に協力してくれる。修学旅行シーズンは日に30件位の訪問になり、一般お客とも重なり大変忙しくなる。シーダーはその状況を理解しているので協力してもらえる。とても助けられている。
- シーダーのまとめ役や会長はいるか?
 - 当初はその方向があったようだが、現在の状態がベターということになった。事務室に必ず名前を書く所がある。名前を書くときには皆さんに声を掛けるようにして話しやすい雰囲気になっている。

4. 関連施設調査の記録1 -いのちのたび博物館-

- シーダー同志の連絡や交流はあるか。
- 交流ゼミ等を行っている。学芸員の講話の後、多くのボランティアが集って意見交換している。
- 養成講座一期生の人数を集める工夫があったか？
- その当時の関わった事務方が詳しいが人事が変わった。当時、養成講座募集に対して申し込みした人は全てを受け入れたようだ。多くの受講生がいて講座する部屋を増やす状況だったらしい。登録後2年毎の更新で、残りたい方や参加出来ずにいる方でも続けたい意思があれば更新を受け入れている。
- 更新の際には相手の意思確認しているのか？
- 日頃参加されている方達にも更新手続きは手紙にして渡している。参加されていない方には手紙郵送。
- 個々のシーダーの能力やレベルの対策を行っているか？ その辺での不具合が起こらないか？お客の反応はどうか？
- 実際は個々のシーダーには能力やレベルの違いがある。講座等に参加して頂く事で少しずつ広く知識を持って頂けるように働きかけている。団体のお客様に関してはそういう解説を希望されるところが多い。シーダーの質に関わらず、お話が聞ければという要望に手ごたえを感じている。一般お客様の質も幅広くあるので、解説を望む方、望まない方もいる。個人宛てに解説のお礼の御葉書が届いたりして励みになっている。
- ボランティアの活動は主に展示場になるのか？ 資料の整理もあるか？
- 資料の整理はない。展示会場の事や体験学習の普及講座のお手伝い。他に友の会員の方でもシーダーから解説が上手になれる様に勉強される会員もいる。展示解説の基本的マニュアルもある。それに肉付けしていく為に館内を案内しながら、尋ねられた内容を学芸員に聞いたり、内容を日誌に書き込んだりして他のシーダーにも知らせるようにしている。
- 友の会は以前の歴史博物館から引き継いだものか？ 友の会が普及講座の補佐をするのか？ シーダーで友の会員もいるか。
- 自然史の方は引き継いだもの。普及講座の会員の補佐はある。学校教育に関して会員の補佐はない。友の会の中にはシーダーになって友の会員なる方もいる。もっと詳しく知りたい勉強した方が会員になる場合もある。

3：質疑応答：ミュージアム・ティーチャー（MT）の役割について

- MTの方は常時5名体制か？
- 実際はMTとして4名で事務を行っている。年間の団体入館者数が10万人位で、その団体対応になる。体験活動を希望される団体や学校側から博物館での授業の希望がある。教育課程に合わせた出前授業もあり、割と幅広く業務を行っている。
- 学校現場から、博物館に来られて（異動になって）どうか？ 学校と博物館の連携をどの様に行っているか？ MT制度を取り入れている他の博物館はあるか。
- 双方の連携についてはどちらでも課題になっている。逆にこちらからも良い提案を望んでいるところ。運営がメインになるので連携の方までは難しい問題。学校側も博物館と連携するような打ち合わせ時間がなかなかとれない。生徒を博物館まで連れて行く手段、予算的な事もある。文化庁の助成事業の助成金なりで予算が組めるので、少しずつでも地道な活動を続けている。出来るだけ現場の研修会等に参加して、少しでも博物館のPRに努めている。
- 出前授業はどれくらいの頻度で、どのように行われているか？
- こちらでは理科と社会科を行っている。理科は6年生担当・5年生担当に限定して年に30件位。社会科は年に3件位の出前。社会科は館内での授業が数十件ある。MTが直接出向いて出前授業をする。授業の中でMTはGuest teacherとして担任の先生がメインで出来る様に考えている。実際は授業の構成の手助けでいたいけど全部を任せられてる状態。学芸員が学校現場へ支援で直接出向く事もある。

※館内見学、バックヤード視察のあと、再び意見交換

4. 関連施設調査の記録 1 -いのちのたび博物館-

4: 質疑: 博物館施設を中心に

●メンテナンスはどうしているのか? 修理費についてはどうか?

○東京の専門の会社と委託契約で定期的に年2回点検をしている。故障が見つかったら修理。

●展示会や設備費等全ての費用と入館料収入では足りないのでは? 有料者と無料者の割合は?

○もちろん足りない。努力しているがなかなかそれに似合う金額は回収できない。

●「いのちのたび」のネーミングの経緯は?

○経過についてはよく知らないが、2つを使い分けるのは難しく、どちらのネーミングにも苦情がある。

●展示交流員は委託契約との事だが常駐で何名か? 委託とあるが派遣会社か?

○時期によっても人数に違いがある。派遣会社は利用していない。展示交流員の対応に評判がかなり良く、他から交流員研修で来られる方が多い。

●博物館の事務所でも皆さん明るく笑顔で対応して頂いた。全体として明るく意識も高くスペース空間も良い。このモチベーションが高い。

○答えになるかわからないが今、若い学芸員の皆さんが増えている。その辺も関係があるかもしれない。

●学芸員は専門職で一般募集か。

○そう。MTは学校の方から来ている。

●友の会の部屋等あるか?

○友の会部屋はある。会員数はホームページでも紹介されている。ボランティアと友の会は別なもの。

●収蔵品のデータベースに関して作業は? システムはどこかで委託されて作られたのか?

○収蔵品のデータベースへの入力等は学芸員がしている。未登録や保留の状態の資料、小さい物から図書まで膨大にある。現在、緊急雇用で国の補助事業を利用し、データベース化を進めている。



たくさんの恐竜が並び、迫力ある1階展示室



調査・研究の過程を展示する「リサーチ・ゾーン」



バックヤード視察



ボランティア・ルームとスタッフ



普及課庶務係長と意見交換

4. 関連施設調査の記録1 -いのちのたび博物館-

千木良芳範委員メモ

○ボランティア(名称:シーダー)について

- ・博物館でボランティア講座を実施し、活動を希望する方を登録している。
- ・原則として月4回以上の活動実績を求めているが、ケースバイケースで対応している。
- ・ボランティアの手当はまったく無い。駐車料金の減免だけ。
- ・運営は特に組織立てはしていない。自主参加、自主活動を基本にしている。
- ・翌月の当番表に各自で活動希望を記入。1月に1桁の活動から200回以上の活動まで、個人差は大きい。
- ・どうしても人員が必要なときは、館のほうから呼びかけて来てもらっている。
- ・職務は体験活動や講座、特別展の補助、館内案内など。展示室に立って、来館者に対応する。
- ・展示ガイドについては館のほうで一応のマニュアルは準備。これを基本に個人が学習して肉付け。
- ・意識を高めるため、学芸員との交流ゼミ(懇談会付)、館主催の講演会等への呼びかけ、研修会など実施。
- ・登録の更新の際には個人の意思を確認している。

○館内の業務

- ・館内で業務している人たちは、シーダーの他に展示交流員、友の会員がいる。

○MT(ミュージアムティーチャー)活動について

- ・博物館の普及課普及企画担当に位置づけられている。
- ・MTは3名。保育園、小学校、中学校の教員を配置。業務は学校団体等の対応、誘致活動、学校教育や家庭教育支援など。多くはセカンドスクール事業(博物館は2番目の学校という位置づけ)。
- ・学校団体は年間で約10万人。博物館でバスを借用して学校へ迎えに行っている。
- ・教員研修や職場体験研修なども実施。
- ・近く的环境ミュージアム、スペースワールドと連携して4期の講座を実施。

○旅行者へのキックバックについて

- ・予算化して繰り替え払い。地公法第164条に基づく市の会計条例がある。琵琶湖博物館が先例。
- 運営は市直営。年間予算は約3億9千万(人件費別)。職員35名(嘱託含む)の人件費は約2億9千万円。
- 太陽光発電設備で年間約1千5百万の売り上げ。H21年度の電気代は3千7百万程度に抑えられた。

前田裕子委員メモ

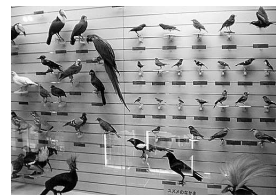
- ・博物館事務所スタッフの明るい雰囲気素晴らしかった。学芸員、ボランティアスタッフのコミュニケーションの良さもこのあたりにあるのか?
- ・館内の案内係りの女性スタッフが明るく丁寧に接客抜群。(業務委託とのこと)
- ・恐竜のコーナーでは自動案内のイヤホンあり。(画像a)
- ・乗ったり、押したり、触ったりの学習器具。(画像b)
- ・館内が広いということ、ゆっくり見て回って欲しいということから、至るところにソファが配置。
- ・未就学児用のキッズコーナーあり。小学生からは入れない。(画像c)
- ・植物、生物の展示の仕方の工夫として、芸術的に見せていきたい。鳥や昆虫などガラスケースだとホコリもかぶらず綺麗に維持できるのでは?(画像d)
- ・集客にも積極的。旅行会社に手数料を支払って送客を依頼しているのは驚き。新博物館で名護市も取り入れた方が良い。観に来てもらう、コースに組み込むのは広くアピールすることにつながる。



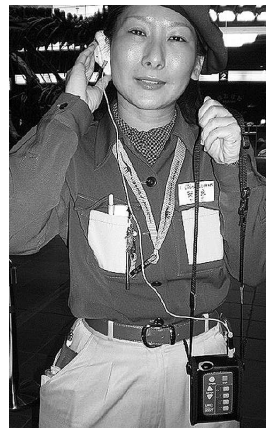
b. 学習器具



c. キッズコーナー



d. 鳥類展示



a. 自動案内

4. 関連施設調査の記録 1 - 萩博物館 -

④ 萩博物館

所在地	萩市大字堀内355番地
設立	平成 16年 11 月
設置者	萩市
構造	鉄筋コンクリート造 平家一部2階建/床面積4,268㎡
建築設計	(株) 建築研究所アーキヴィジョン
展示設計	(株) トータルメディア開発研究所
工期	平成14年7月～平成16年9月
総事業費	約31億4100万円 用地購入3億4100万円/実施設計管理1億1700万円/工事19億5600万円/ 展示製作6億3400万円/備品購入7300万円
駐車場	大型バス8台(1回1000円)/普通車66台(1回300円) ※市民は無料
開場時間	9時～17時/休館日なし
収蔵品総数	18万7千点
組織体制	学芸員・研究員8名(歴史担当3名/民俗担当1名/海洋生物担当1名/考古担当1名/美術担当1名/天文担当1名) 事務局5名(館長含む)/NPO萩まちじゅう博物館
管理・運営	
入館料	大人500円/高校・大学生300円/小中学生100円 ※団体割引30名以下20%

■NPO萩まちじゅう博物館担当業務

設立年	平成16年6月 役員10人(理事8人・幹事2人)/事務局5人
登録者	合計163人(女性79人・男性84人) ※平成21年5月19日現在
活動組織と内容	21班で構成 萩博物館の管理・運営(13班) まちじゅう博物館の推進(8班) 受付/案内/ガイド清掃/カフェ経営/ショップ経営/展示補助/調査補助 研修会開催



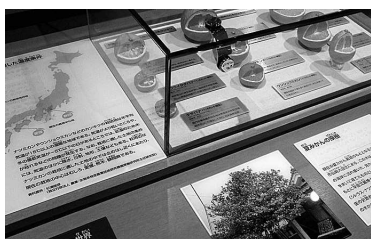
副館長・樋口氏と意見交換



海岸で採集した貝を自由に持ち帰る事が出来るコーナー



住民の寄付で地域の文化財を修復するための告知



地域特産品とリンクした展示



地域の食材を使ってNPOが運営する館内レストラン



壁に収納されたさまざまな情報が詰まった箱

4. 関連施設調査の記録1 - 萩博物館 -

■意見交換記録

平成22年3月11日 13:30~17:00

●…名護博物館新館建設検討委員 ○…萩博物館

1: 萩博物館による施設概要

※萩市は合併が2005年3月で博物館開館が2004年11月11日。長州藩の藩主が、関が原の戦いで敗れて萩に築城し、400年前の1604年11月11日に入城した日を記念してこの開館した。

2: 経緯

- 博物館の前身は科学博物館、学研の博物館から出発。昭和21年、戦後すぐ科学館を市が創立し、それが後に歴史分野、民俗分野などの人文学を加えて、総合博物館となった。名称は萩市郷土博物館。
- 40年くらい運営されてきたが、国道を拡張する際にこの土地に移転した。土地は萩城の三の丸にあたり、国の重要伝統的建造物群の保存地区（※重要伝統的建造物群保存地区）に選定されている。藩主毛利家の重臣の上屋敷に建てられた。
- 平成12年の4月に博物館建設準備室を設置し、博物館の基本構想を設定した。
- 市民代表や博物館の専門家、日本博物館協会と一緒に、建設予定地の発掘調査などを行いながら一年かけて作った。そして平成13年3月に基本構想策定。
- 残り期間が4年と短かったので、どちらかという基本計画に限りなく近いものだった。
- 基本構想を元にプロポーザル・コンペ方式によって建築設計者（東京のアーキビジョン）と展示設計者（トータルメディア）決定。
- 建築の工事の方が決定したので、平成14年の5月に入札終了。6月に建設予定地の発掘調査が終了したので、7月から建設工事。展示設計の完了が15年の3月で、そこから9月の建築が完了し展示工事。平成16年11月に開館。去年の8月に入館者50万人を達成。年間は9万人前後の入館者。
- この数字は開館当初から殆どかわっていない。激減もしなければ増えてもいない。今年は新型インフルエンザの影響で団体客が減少。
- 管理運営が萩市とNPOまちじゅう博物館という、市と市民が共同でやっているというのが特徴。
- NPOに業務委託している部分は、受付、ショップ、レストラン、清掃、守衛の業務。市直営なので、指定管理業者ではない。全国の博物館の中でも非常にユニークな運営ということで、去年がおとしの日本博物館協会にて事例報告した。

3: 質疑応答

- NPOに全部任せている？
 - 任せている。

- そこから場所代とかは取るのか？
 - これまで育成ということで場所代をとっていなかった。5年たってNPOも自立していかなければならないということで、22年度から場所代をとることになった。
 - 今事務局が同席していないので分からないが、一般よりは安く設定している。市の施設を使う場合の基準どおり

- NPOの他に友の会はあるか？ NPOが博物館友の会の機能を果たしているのか？
 - 友の会はない。これ以外に委託している部門については謝金ができる。ガイドは3000円、それ以外は5000円。それとは別に学芸サポートという無償の班がある。

4. 関連施設調査の記録1 - 萩博物館 -

4:NPOに関する質疑

- この萩まちじゅう博物館の設立は博物館と同時なのか、その時に委託したか？
 - 委託の方針は当初から決まっていた。
- NPOの人員集めはどのように行ったのか？
 - まず博物館建設のときから、市民とやっていくというのが命題になっていて、平成14年に博物館ボランティア講座というものをやった。
 - 文科省の補助金を使ってやったと思うが、先進的な活動をしているところの人を呼んだりして、博物館ボランティアとはなにかということ、市民を対象に年に10回やった。100人くらい来たと思う。
 - そのなかでも意識が高い方が集まってNPOを立ち上げたということ。そういう意味では行政が主体となって立ち上げたという形。
- 全員無償なのか？
 - いいえ。ガイド班、守衛清掃班、受付班、ショップ班、レストラン班は有償。そのほかの班は無償。無償班のみに入っている人もいるが、有償班に入っている人は必ず無償班にも所属しなければならないという規約になっている。
- 会の活動資金はどうなっているのか？
 - レストランやショップの黒字分が活動資金。
- お金の流れは？
 - NPOが個人に謝金を払う。その委託料は市がNPOに払っているの、NPOはそこから個人に払っている。
- NPOの収入源は委託料と入館料か？
 - いいえ。委託料は入るが入館料は市に入る。委託料とショップ、レストランの売上げが収入源。
 - NPOの運営費は前述の2つの収入源で、人件費やレストランの仕入れや光熱費も払っているのか？
 - レストランの光熱費はNPOに払ってもらっているが、それ以外は市が払っている。
 - レストランもショップも黒字。
- 指定管理という形ではなく、この形式にしたのはなぜか？
 - 指定管理という話は全然なかった。とにかく、まちじゅう博物館の理念を担っていくのが市民。市民とともにやっていく、という。
 - 有償ボランティアという話もいろいろ議論した。その結果有償ボランティアもありうるのではないかと。有償といっても謝金程度。それで生活費をどうのこうのというわけにはいかない。心意気の部分で携わってもらえけれど、レストラン、ショップ、受付、守衛清掃は労働でもあるので、それに対するほんの小さいお礼、という。とにかく、市民と一緒に作っていく、というところから始まっているので、指定管理者という頭は最初からなかった。
- NPOの理事長さんは普段どのようなお仕事をされているのか？
 - もう70台半ばなので職には就いていないが、以前は地元のホテルの支配人。江戸時代から続く豪商のお宅（今は文化財として公開されている）を寄付され、隣に新しい家を建てて住んでいる。
- NPOの年齢層は？
 - 高い。中核は60.70代。女性は子離れした50代くらいの方もいる。基本的にリタイアされた方。
- 事務局の人数は？
 - NPOの事務局は女性のスタッフが4人。事務局長にもう一人。事務局長は市の職員で、庶務係長が兼任している状況。これも育てるということで市から1人だしているという状況。いずれはNPO独自で出すような方向で自立していくと思う。

4. 関連施設調査の記録 1 - 萩博物館 -

●事務局の職員のお給金はNPOで出して、生計をたてられているのか？

○はい。生計を立てられる額かといえどもどうかと思うが、月12万程度、最低賃金で雇用という形をとっている。

●館の年間予算は？

○9000万円台。

●館の収入はどこから？

○入場料。平成21年の4月からは駐車場の料金を頂くことになり、それでも収入をえている。

●館の年間収入はどれくらいか？

○入館料が3300万、駐車場は始まったばかりでわからないが、5、600万はいつていると思う。

●企画展などは年に何回くらいか？

○今年度は5回。来年度は4回。学芸職員が少ないので5回はきびしい。

●この中に巡回展はあるか？

○ない。巡回展はやらないで独自の企画をやることにしている。

●だいたい年間の企画展の予算は？

○そんなにない。特別展はたくさん予算をとるようにして、だいたい1回1500万円。

●館の予算と人件費は別か？

○正規職員の人件費とは別。嘱託は予算から出ている。

●ショップやレストランを運営するためにはノウハウが必要かと思うが、人材はどう集めたのか？

○レストランをやっているのは主婦の方。基本的には主婦の家庭料理のような感じ。ショップも主婦の方がされていて、商品の選定なども彼女らがしている。5年たったのでかなりこなれてきた。展覧会にあわせて商品を替えたりしている。

●地元の食材を使う時にお店と連携して仕入れたりしているか？

○よくわかっていないが、たぶんそうされているのではないかと。博物館の裏に畑があり、その野菜も使用しているようだ。

●テーブルなどの什器は市が用意したのか？

○はい。

●萩市にくる観光客で何割くらいが博物館を訪れるか？

○統計を取っているが、いい時で8%、少なくて4%くらい。人数にすると130、140万人くらい。1割来ていただけると一番いいが、なかなかそこまではいかない。

●入館者が年間9万人ということだが、博物館のみで9万人か？

○はい。まちじゅう博物館全体だと30、40万人。

●観光ポイントが限られているようなので、博物館にもっと人が入るように思うが？

○そうでもない。市内に県立美術館や吉田松陰記念館もある。ここでだけというわけではない。

●まちじゅう博物館の中核施設ということで、ここから他のところに移るとい流れなのかと思ったが、そうでもないか？

○はい。最初はそういう観光バスも来ていたが、最近は・・・やっぱりお金を500円とるところがネック。やっぱり無料のところに行く。

●まちじゅう博物館というものをPRする中心は市か？

○まちじゅう博物館推進課という課があり、そこが調整をしている。

●まちじゅうたぐさんの施設をひとまとめにするような組織はなくて、萩博物館がそういった役割を？

○まちじゅう博物館推進課がコーディネートしている。

4. 関連施設調査の記録1 - 萩博物館 -

- 市としての構想はまちじゅうが博物館ということだが、萩博物館の位置づけは？
 - 中核施設という位置づけ。あと合併したところに順次地区ごとの組織を作っている。

- 印刷物は市の予算か？
 - はい。

- NPO萩観光ガイドというのを地図で見つけたが？
 - あれは完全に別組織。観光ガイドに徹する組織。
 - 観光ガイドの組織がいろいろな組織に分かれてしまったのか？
 - 謝金をとったり、とらなかつたり。それを市が音頭をとって統一したのがNPO萩観光ガイド。
 - 博物館も観光と連携するために働きかけているのか？
 - もちろんやっている。むしろ観光の方が求めてくる。

- 博物館のウリとしては高杉晋作なのか？
 - そういうわけでもない。最初にトータルメディアと作ったときは、時系列的に展示すると展示スペースが足りないので、城下町と維新にテーマを絞り、そして自然がくっついた形にした。

- 博物館とNPOで方向性が違ったりということはないか？
 - 最初はとまどいがあった。5年たってようやく小慣れてきたが、まだまだ課題がある。我々はやはりNPOに自立して欲しいが、行政が指導して作った組織なので、どうしても我々に頼ろうという意識が見受けられる。我々がお膳立てして、これやってくださいよといわないとやってもらえない、というような。理事が実務的にも中心になるみたいな感じた。

- 運営のコツみたいなものはあるか？
 - お年寄りが多いので、しっかり話を聞いて、しっかり説明して、納得がいくまでという感じ。

- 理事や理事長などの役員は有償か？
 - はい、有償。常任理事が3人、あとは理事じゃない方が5人。たいした額ではないが有償。

- NPO萩まちじゅう博物館の方々が企画展に参加するというのはあるか？
 - たとえば企画展のワークショップなどを一緒にやることもある。または展覧会によってはNPOの方の成果を展覧することも。基本的には企画展は我々主導。一部関わることもあるということ。

- 有償の方々は、これは自分たちでシフトを組んだり、ひとつの法人格として業務をやるのか？ 固定のメンバーで行っているのか？
 - ほぼ固定のメンバー。固定のメンバーでローテーションを組んでいる。人数が足りている班もあるが、足りないところもある。

- まちじゅう博物館推進会議というのを構成している組織というのは、博物館とかその他の見学スポットの関係者で構成されているのか？
 - 今日は推進課の職員がいないので正確に答えられないが、地区ごとに会があり、その代表がくるのではないのかと思う。博物館は後方支援はしているが中心ではないので・・・

- 設立費用、館を建てる費用は、道路を拡張する際の保証費用などだが、他にかけた費用はあるか？
 - ここに書いてある通り。あとは補助金などが若干。木材活用や林野庁の補助金。本体部分には補助金が出ていない。

4. 関連施設調査の記録1 - 萩博物館 -

●授業で使うというのはどのような形で？

○団体見学や館内事業といって、こういうメニューできてもらえれば、学校教育を支援するという。ただ単に団体で見学ということもある。

●学校の方から団体見学があるときの対応はNPOか？

○はい。われわれが提供しているメニューの他は、NPOのみなさんが対応している。

●駐車場料金、普通車で1回300円というのは、入館者に影響はでなかったか？

○まだわからない。そうかもしれない。市外の方は300円いただいている。

●館を利用しなくて、駐車場だけ利用してもいいのか？

○はい。近くに史跡などもあるので、駐車場利用者3分の2はそちらに行かれている可能性がある。

●館が学校向けに設定したプログラムは、どんなものがあるか？

○小中学生向けのギャラリートークや、学習キットのようなものを使った授業など。

●これは学芸員さんが担当しているのか？

○はい。われわれが担当している。

●萩市のまちじゅう博物館推進課は観光課とは違うのか？

○まちじゅう博物館も博物館も、部署は歴史まちづくり部。教育委員会ではない。観光課は別の部。世界遺産推進課などが同じ部に属している。

●保存や整備も、歴史街づくり部からか？

○はい。文化財などには観光からではなく、歴史街づくり部からでている。

●博物館として集客についてなにかアクションを起こされているか？

○夏は親子連れを対象にした企画展を開いていて、かなり好評。1日2000人こられてパニックになることもある。自然系、海、海洋生物、昆虫などの企画展で、ちなみに来年は未確認生物。とくかく、季節に応じてターゲットを絞った展覧会をやるようにしている。今やっている展覧会は人形や茶道具で、女性をターゲットにしている。

●入場者は県外が多いか？

○いえ、市外が多い。3分の2くらいが市外。

●コミッションを払ってどこかに委託して集客してもらうとはあるか？

○ない。

●まちじゅう博物館は、1日ではまわれない？

○はい。もっとテーマを設定したコースをつくれればいい。これはNPOの課題。

●観光ガイドや観光案内は？

○観光協会。よくわからないが、おそらく市内の民間企業と市が出資して作っている。

●NPO萩まちじゅう博物館のガイド班はどこをガイドするのか？

○まちじゅう博物館は博物館内、NPO萩観光ガイドは市内。住み分けている。

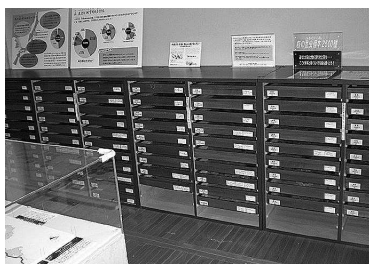
●パンフレットをみると小中学生100円だが、無料ではないと。

○これは彼らがプライベートできた場合。市内の小中学生が授業で使う場合は無料。ただし、市外の小中学生は授業であっても料金はいただく。

4. 関連施設調査の記録1 - 萩博物館 -

前田裕子委員メモ

- ・博物館建築と共に行政主導のNPO法人を立ち上げている。事務局は行政職員が5名ほどいる。
- ・NPOは黒字との事。収支を見たわけではないのでちょっと疑問。売店とレストランの運営の売上はNPOのものらしいが繁盛しているようには見えない。市の委託金のおかげか？
- ・昆虫の展示の仕方、ここは引き出しに入れていてすっきり収納（画像a）
- ・プラスチックケースごとに昔の衣類、建物の模型、レプリカなどが収納されていて、それらを取り出して見ることが出来るスタイル。（画像b）
- ・旅行会社との契約は無し。
- ・まちじゅう博物館というのは市内の見所が、そこかしこに歴史文化の遺産があるということ。そして、市の文化教育科で修復、保存していこうという理念のもと、「まちじゅう博物館」というネーミングでの構想が練られ進められている。キャッチコピーのとおり、この萩博物館に必ず訪れて出発するというものではない。残念！ 名護市については、展示物と市内の場所をリンクさせるような案内表示の仕方をすることで、まちなか観光へ誘導出来るのではないかな？



a. 引き出し型の収納箱



b. 収納箱を利用した展示

4. 関連施設調査の記録 1 - 九州国立博物館 -

⑤ 九州国立博物館

所在地	福岡県太宰府市石坂4-7-2
設立	2005(平成17)年10月開館
設置者	独立行政法人・福岡県
面積	敷地面積160,715㎡/建築面積14,623㎡/延床面積30,675㎡
規模	東西160m×南北80m/最も高い所 36m/地下2階・地上5階/3種類の免震装置
設計期間	1999年9月~2001年3月
施工期間	2002年3月~2004年3月
フロア構成	4F 文化交流展示室「海の道、アジアの路」/ 3F 特別展示室/ 1F エントランスホール(あじっば・ショップ・カフェ)
収蔵品	370件
寄託品	1,105件
組織	国(独立行政法人)30名/福岡県立アジア文化交流センター 16名
活動	○教育普及 あじっば/展示での体験学習プログラム/きゅうぱっく(5種類の教材キット)/大学連携 ○交流 400名のボランティア/4カ国語(英語・中国語・韓国語・日本語)によるガイド ○保存科学・修復
観覧料	一般420円/大学生130円
開館時間	9:30~17:00(月曜日休館)
入場者数	2008年度(1,219,487人)
会員サービス	友の会年会費1万円/パスポート(一般3,000円・学生2,000円)/キャンパスメンバーズ



意見交換



1階エントランス



床下に設置された免震装置(巨大なパネ)の一部



博物館周辺が写る衛星写真を焼き付けた床面タイル



収蔵庫・修復庫に見学者用の窓を付けてバックヤードを公開



最新のスキャナー装置で3Dコピーされた模型

4. 関連施設調査の記録 1 - 九州国立博物館 -

■館内視察

平成22年3月12日 9:00~12:00

千木良芳範委員メモ

- ・建物の延床面積は30,000㎡、ダブルスキングラスの壁面。
- ・ロビーでは様々な催し物を行っている。物産展や車の展示会、パーティなどもやっている。直接に営利を目的とするものは許可していない。博物館の運営目的に合致すれば無料で貸している。
- ・くん蒸の薬剤は使用していない。IPMはきめ細かく管理している。
- ・IPMのモニタリングは月2回、市民ボランティアがデータを採り、分析も行っている。
- ・三次元デジタルタイザやCTスキャンを活用した保存科学の推進。借りたもののチェック(健康診断)も希望があれば博物館ですべてやっている。
- ・特別展の予算は億単位。トピック展(常設展の小部屋の展示替え)で2,000万くらい。
- ・九州国立博物館は、規模が大きすぎて、県立や市町村立博物館の参考にはなりにくい。

前田裕子委員メモ

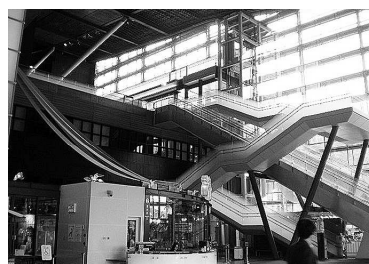
- ・耐震構造、収蔵庫、修復作業視察。さすが国立といった感じの大きなスケール。(画像a,b,c)
- ・ロビー部分のパーティ会場としての活用を認めている。(料理ケータリングOK、民間利用OK、国際会議後のレセプションなどで使用経験あり)
- ・太宰府天満宮との隣接で双方の客の誘導に有効ではないか。名護新博物館の建設場所の判断においては、博物館へのアクセスや近隣の地域や文化財観光への広がりをもふまえた上で判断いただきたい。
- ・子供がさわって、音を出してあそべる「あじっば」というコーナーあり(アジアの原っぱの意)。アジアの国の子供用玩具や楽器、衣装などが国ごとに展示されていて、自由に触れることが出来る。触覚や聴覚にうたえるものも用意しておくのは、観覧者に楽しみを与える。
- ・ロビーラウンジでは、アマチュアによるピアノやフルート演奏があった。
- ・バックヤードツアーを積極的に行っている。最初から見せる目的で設計。(画像d)
- ・案内担当者も話上手で明るく、冗談も交えながらの案内。



a. 1階入口



b. 1階エントランスホール



c. 1階エントランスから2階の展示室に続くエスカレーター



d. バックヤードで修復作業を見学

4. 関連施設調査の記録 1 - 調査を終えて -

新名護博物館建設検討委員による調査報告まとめ

千木良 芳範

新名護博物館の運営について

博物館内で仕事をするすべての人員を市の職員でまかなうには限界がある。館全体の事務員、学芸員を市の職員で、その他を市民やボランティア、民間企業等を活用することが可能と思われる。

萩博物館の場合、警備業務と清掃業務を市民団体に委託し、ショップとレストランを同じ団体に運営(この場合、賃借料はとっている)させている。運営母体となる団体の活動を保障する意味で、委託業務とショップ等の運営を与え、その他の部分で団体の尽力を活用しながら館の運営を進めている。このため萩博物館の正規職員は5名(事務局)にとどまっている。こうした方法の改良で、新名護博物館でも運用が可能かもしれない。

市民団体、ボランティアとの連携

萩博物館だけでなく、視察したすべての博物館で来館者への展示の説明はボランティアがあたっていたが、義務を負わない自由なボランティア活動と館の方針との整合性が取れるのか、は少し疑問。いつでも必要な人員が確保できるのだろうか。その意味で、市民団体とボランティア団体が並立している状況というのは便利かもしれない。運営費を確保されている市民団体がある程度の義務を負い、まったくのフリーな状態でのボランティア団体がそれを補佐する体制である。

この場合、いずれの団体も市が主導して立ち上げ、育成していく必要があるが、いつの時点で団体の独立を促すのが難しい。萩博物館の場合は、市全体としての観光ボランティア推進協議会というのがあり、基本的な団体は市が主導して育成されてきた経緯があるようで(長崎市のさくら協議会もほぼ同様らしい)、そうした受け皿となる団体が市内にあればやりやすいかもしれない。

前田裕子

観光業を営んでいるという事と、一般市民で女性という立場で視察したので、博物館とは何たるか?という点ではお叱りを受けそうだが、九州国立博物館のキャッチコピーのように、「面白くなければ博物館じゃない」という気概で名護新博物館は建築していただきたいと思っている。

博物館は地元の子供たちの学習の場であると同時に、地元の大人たちも自己を振り返り故郷を見つめなおす場でもあり、何度でも足を運ぶ場になってほしい。

また、観光客に迎合するというわけではなく、県内一面積の広い名護市を説明する場としても活用でき、収蔵品の陳列や文字の説明が多くなりがちな展示ではなく「みて、感じて、触って、現在や外とのつながりを感じる」という展示の仕方、ストーリー性のあるものにしていただきたい。九州国立博物館は展示説明の文書は「60文字以内」とシンプルであり、「いのちのたび博物館」は「体験できる」を売りにし、旅行会社と契約の上、送客に手数料まで支払っている。

他の地域より古くなった名護博物館は、これからの時代の新しいスタイルのどこよりも魅力のある博物館を創りだせるチャンス。市内のガイドが出来る人々のネットワークづくり、展示物とリンクさせたフィールドでの体験メニューや名所旧跡など、建築とは別のやらなくてはいけない部分がたくさんある。今回の視察先は、博物館建築と共にそれらの仕組みやネットワークを構築していったご苦労を乗り越えていた。まずは「まちなか」とのリンクの仕方を検討した方が良いかもしれない。

4. 関連施設調査の記録 1 - 調査を終えて -

安里 進

短い期間で大変参考になる視察だった。どの博物館もそれぞれ非常に工夫していた。まず感じたのはネーミング。例えば「いのちのたび博物館」。北九州市立自然史博物館という名前では、観光客はこないのではないと思う。世界中の誰にでも共通するキーワードでネーミングされている。みんなが共通に持っているものを上手に使うことで、名前だけで入客率を上げることができると感じた。

また、萩博物館が「まちじゅう博物館」とか、長崎も長崎市全体を博物館という位置づけを行っている。地域と博物館を連携させた大きな博物館にする試み。

いのちのたび博物館では、ミュージアムティーチャーというのがあり、学校の先生を博物館の職員に入れて、学校との連携をとる試みもあった。名護博物館も、すぐには難しいかもしれないが、このような要素を取り入れても良い。

展示を考える上でヒントになりそうなのは九州国立博物館の展示。

時間軸で展示を分ける、先史時代、古墳時代、というような展示はどこにでもある展示。九博ではテーマ展示をしており、解説してくれた方もテーマ展示がミンだったと言っていた。時間軸で切らないで、テーマで水平的に見せる。見に来る人は歴史的に順序だてて見たいわけではない。現在はそれを学芸員が整理して無理やり見せている場合が多いが、テーマごとに展示すると、すごく分かりやすくなる。新名護博物館の場合には「名護・やんばるのくらしと自然」というテーマが大きいので、考古資料も民俗資料も、いろんなものを一緒に展示する方法も有効ではないか。

4. 関連施設調査の記録 1 - 調査を終えて -

現状の課題と視察地から習うべきこと

名護博物館 村田 尚史

○ 運営方法について

博物館として質の高い公共サービスを提供し続けるためには、職員の仕事分担を明確にし、その仕事に専念できる体制を整えなければならない。現名護博物館の職員数は館長を含め8人であり、おおよその仕事分担は決まっているものの、その線引きは明確ではない。職員は事務仕事から調査研究、展示、教育普及に至るまで、幅広く仕事をこなすが、その分各々の内容については浅くなってしまう。例えば、広報活動は博物館の存在や活動内容を市民に発信する重要な仕事であるが、現博物館では専門に担当する職員がいない。そのため、現状では広報活動が消極的である感が否めず、名護博物館の認知度は、観光客をはじめ県民からもあまり高くないように思われる。これは早急に改善すべき点だろう。しかし、市町村レベルの博物館では職員配置の増員が望めず、少ない職員で多岐にわたる仕事をしなければならない側面があるのも事実である。

そこで参考にしたいのは、今回視察した萩博物館の管理・運営体制である。同博物館の職員体制は学芸員8人、事務局5人の計13人であり、現名護博物館（8人）と比べても大体同程度と考えてよいだろう。最大の特徴は、受付、清掃、ショップ・カフェなどの管理運営をNPO法人 萩まちじゅう博物館（会員：163名）が担当している点である。このNPO法人は仕事の性質上、21班に細分されており、このうちの5班が上記の管理運営に当てられている。その他の16班は博物館の調査・研究や教育普及事業の補助活動を行っている。前者の5班については個人に謝金を支払っており、後者の16班は無償のボランティアである。このように、NPO法人を使うことで、市民にできる仕事は市民に任せ、職員の負担を軽減することに成功していると言えるだろう。

ただし、先方によると、問題点がないわけでもなく、行政主体でNPO法人を立ち上げることによって、NPOの主体性が薄れ、行政に依存的になってしまうという課題が挙げられていた。また、この方法を採用するならば、新館が開館する頃には、NPO法人を立ち上げて組織体制を整えておかなければならない。名護の地域性や市民の意識の高さなどを考慮しつつ、NPO法人に人が集まるか、また持続的に組織が維持できるかを十分吟味しなければならない。

○ ボランティアおよびNPO法人について

現在、全国的に見てもボランティアを取り入れる博物館が多くなってきている。今回視察した博物館もすべてボランティアの導入を行っていた。名護博物館の活動理念の一つである「みんなで作る博物館」をより具現化させるためにも、新館では市民ボランティアの導入を検討すべきである。ボランティアを導入する利点として様々なことが考えられるが、おおまかに考えると下記の2つが挙げられるように思う。

- a) ボランティアに参加する市民の生涯学習を推進させ、市民活動を活発化させる
- b) 博物館の運営を補助する

今回視察した博物館も含め、全国的に主流となっている博物館ボランティアの仕事は、展示解説や体験講座等の教育普及事業の補助活動や調査・研究補助活動であり、これはa)の側面が強い。すなわち、ボランティアが自分の興味のある分野について活動に参加し、その知識を深めることがボランティア自身の生涯学習にもつながる。今回視察した長崎歴史文化博物館や九州国立博物館では、外国語による展示解説などボランティアのスキルを活かしたものも見られた。

4. 関連施設調査の記録 1 - 調査を終えて -

これらの活動は博物館の運営を補助する役割もあるため、b)にも当然あてはまる。ただし、自分の興味のある分野に積極的に参加する反面、それ以外については関らないという点が挙げられるし、参加の度合についてもボランティアの自由に委ねられているため、運営を一定の質で補助するという側面は弱いように感じられる。実際、いのちのたび博物館などでは、展示解説ボランティアのシフトが彼ら自身に委ねられており、ボランティアが常に博物館にいて展示解説を行うという状態ではなかった。同博物館には展示交流員という専門のスタッフ（業務委託）がボランティア以外にいるため、ボランティアが常時博物館にいる必要性は低いのだろう。

しかし、新名護博物館でボランティアを導入する場合、前述の職員数が少ないという性質上、博物館の管理部分も含めてa)とb)の両方を満たしたボランティア導入を目指さなければならない。このためには、ある程度の組織体制を持ち、管理・運営能力を備えた市民団体、すなわちNPOが必要になると思われる。現在、名護博物館には友の会があり、これをそのままNPO法人にするという案があるが、これは館の管理・運営を補助するという意味からするとあまり好ましくない。なぜなら友の会は、会員が会費を払って自らの知的探究心を満たす活動をする、あるいは何らかの博物館サービスを楽しむ場であり、ボランティアとは基本的に性質を異にするからだ。現在の名護博友の会は70名ほど会員がいるが、このうちボランティア精神を持って活動する会員は一部だろう。あくまでもボランティアと友の会は別の組織とし、それぞれ独自に活動した方がよい。実際、今回視察した博物館でも友の会とボランティア・NPOについては明確に組織分けを行っており、友の会が博物館の管理・運営に関わるような例はほぼ見られない。ただし、個人が友の会とボランティア・NPOの両方に参加するという例はあり、これについては何ら問題ないだろう。

NPO団体の設立については、先に述べた通り、萩博物館を参考にすればよいと思われる。また、視察した各博物館では、ボランティアの心構えや期待するボランティア像などについて事前に研修を行い、これを経てからボランティアを認定している。認定後も学芸員や専門講師による定期的な研修を行い、更新の際に必要なボランティア参加日数を定めたり、展示解説のマニュアルを作成したりするなど、ボランティアの意識向上、質を高めるための様々な工夫を行っているため、これらを参考にする必要があらう。

○ 学校教育との連携について

現名護博物館において、学校教育との連携で挙げられるものは、小学校の総合学習における博物館の活用、博物館における社会科見学などである。新館に向けては、博物館と学校との連携を密にし、出前講座なども積極的に行いたいところである。しかし、多忙を極める学校事情を考えると、これらの活動は博物館側から積極的に働きかける必要があるだろう。

いのちのたび博物館では、学校教育と博物館を橋渡しする職員としてMT（ミュージアムティーチャー）が博物館に配置されており、学校用の体験プログラムを積極的に実施するほか、学校教員が授業で博物館を利用しやすいように、小中学校の各学年・科目の授業内容に沿った博物館利用の手引きやガイダンスビデオを充実させている。また、遠方からの修学旅行の誘致等も行っている。MTは学校教員を経てから博物館に配置される職員であるため、学校教育の事情にも通じており、この体制は学校教育との連携に対して非常に有効な手段と思われる（ただし、博物館の事情も併せて把握した上でMT自身が講座の講師を務めているため、MTの負担は大きいように感じられた）。

長崎歴史文化博物館では、学校教育を支援するために各種教育プログラムを用意しており、博物館に来ることのできない遠方の学校については、リアルタイム通信で行う遠隔授業などにも対応している。

このように、学校側が博物館を利用しやすいよう、手引きやプログラムを用意するなど、学校教育の現場に考慮した活動を展開していく必要があるだろう。そのためには、やはり、学校教育との連携を専門に担当する職員が最低1人はいた方がよい。

4. 関連施設調査の記録1 - 調査を終えて -

○ 展示について

展示はその博物館の特色が最も見える部分と言ってもいいだろう。今回視察した各博物館でも様々な展示が見られた。名護博物館のテーマは「名護・やんばるのくらしと自然」であり、現状の常設展示は、くらしと自然をトータルにイメージできるような展示を試みている。しかし1階部分はともかく、2階については展示のイメージが掴みにくく、改善の余地がある。新館建設に向けては、基本テーマをどのような切り口で展示するかが最大の課題であり、視察した博物館の展示についても大いに参考にすべき点があるだろう。

展示テーマについて

いのちのたび博物館では、自然史と歴史でゾーンを完全に分けており、その中でテーマごとに区分して展示していた。こうすることで、来館者は何が展示されているのか理解しやすくなる。九州国立博物館では、歴史を追って展示する手法ではなく、テーマごとに抽出して展示することでそれぞれのまとまりを高めていた。出島史料館については、出島の景観をまるごと復元させて展示するという大胆な発想である。いずれにしても、来館者に分かりやすい展示が大前提となっていた。新館建設に向けてどのようなテーマを切り口にして展示するか現時点ではわからないが、来館者がわかりやすい展示を心がける必要があるだろう。

展示による情報発信について

九州国立博物館では、来館者の目を疲れさせないために壁の展示を極力なくし、キャプションの字数も少なく制限するなど工夫していた(写真1)。キャプションの字数については学芸員の意見が割れそうであるが、読みやすい字数で、かつ最低限の情報は発信できるものを採用していく必要があるだろう。

展示の手法とその工夫について

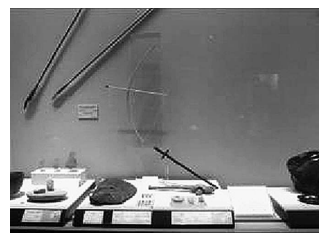
いのちのたび博物館では、恐竜の模型が動く・3D映像で再現する・家をまるごと復元し、中に人形を置いて音声を流す(写真2、3:照明も昼→夜へと変化し凝っている)など、五感にうったえる展示を行っており、これは来館者の好奇心を喚起するのに一役買っている。

萩博物館では、様々なテーマで体験ボックスを作り、これを展示室の棚に並べている。来館者が自分の興味のあるテーマを選んでボックスを開けば、中に必要な道具が一式入っており体験できるという仕組みだ(写真4)。

また、海の生物展示スペースでは、展示ケースに地元の海の貝殻を山盛りに入れておき、来館者が気に入った貝を持ち帰れるという面白い試みを行っている(写真5)。来館者は貝を無料でもらえるお徳感と、貝を発見する楽しみの両方を味わえる。さらには、地元の海の貝類について興味が湧く可能性もある。

九州国立博物館では、「あじっば」という子ども専用の展示室があり、各国の文化を代表する道具などを体験しながら学べるようになっている(体験型展示、写真6)。これらの道具等については7カ国語の説明がついている。

視察した各館の展示における工夫はここでは書ききれないが、新名護博物館の展示では来館者が楽しみながら学べるような体験型展示を取り入れるべきだろう。



1. 九州国立博物館



2. 北九州市立いのちのたび博物館(昼の照明)



3. 北九州市立いのちのたび博物館(夜の照明)



4. 萩博物館



5. 萩博物館



6. 九州国立博物館「あじっば」

4. 関連施設調査の記録 1 - 調査を終えて -

展示の様様替えについて

いのちのたび博物館では、常設展示室の壁際にポケットミュージアムという小さな空間をいくつか設け、一つの空間でテーマを変えて柔軟に展示替えできるよう工夫している。また、九州国立博物館では各展示室の裏側に資料搬入出用の通路を通していている。模様替えの際には、各展示室の裏から資料が搬入出できるので、その展示室は公開できなくなるが、全体としての閉館はしなくてもすむ。

現名護博物館は開館してから今年で26年目を迎えるが、この間、常設展示はほとんど変化していない。上記のような工夫を新館施設計画に盛り込めるか否かは、予算、敷地面積等の制約次第であるが、いずれにしても、博物館活動に沿って柔軟に展示内容を変えられるよう、工夫する必要があるだろう。

○ 諸設備について

今回視察した博物館のバックヤード見学では、収蔵庫、事務室、研究・実験室、ボランティアの待機室などを回った。敷地の確保や維持管理の予算、新館の活動テーマなどを館内で十分に協議した上で、参考にするべき施設は参考にすればよいと思う。

ただ、当然のことながら、博物館として備えるべき最低限の設備は必要である。地域の財産を保存するという博物館の使命を考えれば、重要文化財や模式標本（タイプ標本）を管理・保存できる特別収蔵庫が必要になるだろう。現博物館には、研究・実験室に当たる部屋がないが、これは研究面はもちろんのこと、科学講座などを実施するときにも必要となる設備である。

いのちのたび博物館では、太陽光発電設備を取り入れていたが、環境意識が世界的に高まっている昨今、このような新エネルギーを活用する設備を取り入れることも、前向きに検討した方がよいだろう。

